第4節　常盤構内(山口大学工学部構内遺跡)の調査

1. 工学部定歪速度応力腐食割れ試験用実験室新営工事に伴う試掘調査

調査地区　常盤構内課外活動棟北側
調査面積　約20㎡
調査期間　平成16年8月31日～9月3日
調査担当　横山成己

調査結果

(1)調査の経緯(図27)

常盤構内北東部の駐車場敷地西側に定歪速度応力腐食割れ試験用実験室の新営が計画されたことを受け(発掘調査を要する工事計画として、平成16年6月22日に埋蔵文化財資料館専門委員会にて承認)、開発予定地の埋蔵文化財発掘調査を実施することとなった。開発予定地の内、実験室建設予定地は谷を埋め立てた造成地であることが明白であり、開発による掘削が地山面まで到達する可能性はないと判断されたため、調査は課外活動棟の北西側道路における配水管予定地(A区)と、課外活動棟北側空閑地における配水管・埋設電線予定地(B区)を対象地とした。A区は幅0.6m×長さ22m、B区は幅0.7m×10.5mの規模を有する。

(2)基本層序(図28、写真43・44)

A・B区で確認した層序は以下の通りである。

第1層…アスファルト舗装(厚5㎝)

第2層…鉱滓(層厚7～50㎝)

第3層…造成土(層厚14～100㎝以上)

第4層…明黄褐色(10YR7/6)粘性砂質土に赤褐色(5YR5/8)粘土が混ざる～地山

(3)小結

今回の調査では、A・B両区の南西部において造成土直下に地山を検出した。地山は北東方向に向かって緩やかに降下しており、調査区北東端部では現況地表下1.2m以下に下っている。常盤構内の北端部は北に降下する谷地形を埋め立てて造成されていることから、これは旧地形を反映しているものと考えられる。地山面には遺構は存在しておらず、仮に過去において存在していたとしても土地造成時の掘削により現在は消滅したものと思われる。

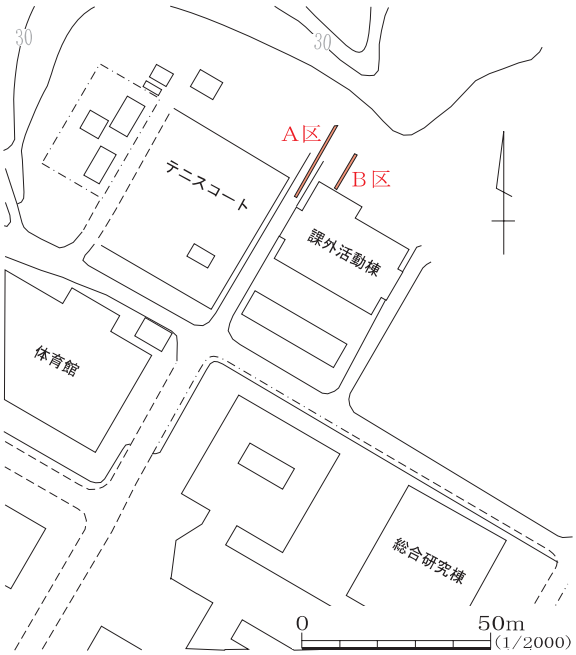

図 27　調査区位置図

写真 43　A区北東壁土層断面（南東から）

写真 44　B区北東壁土層断面（南東から）

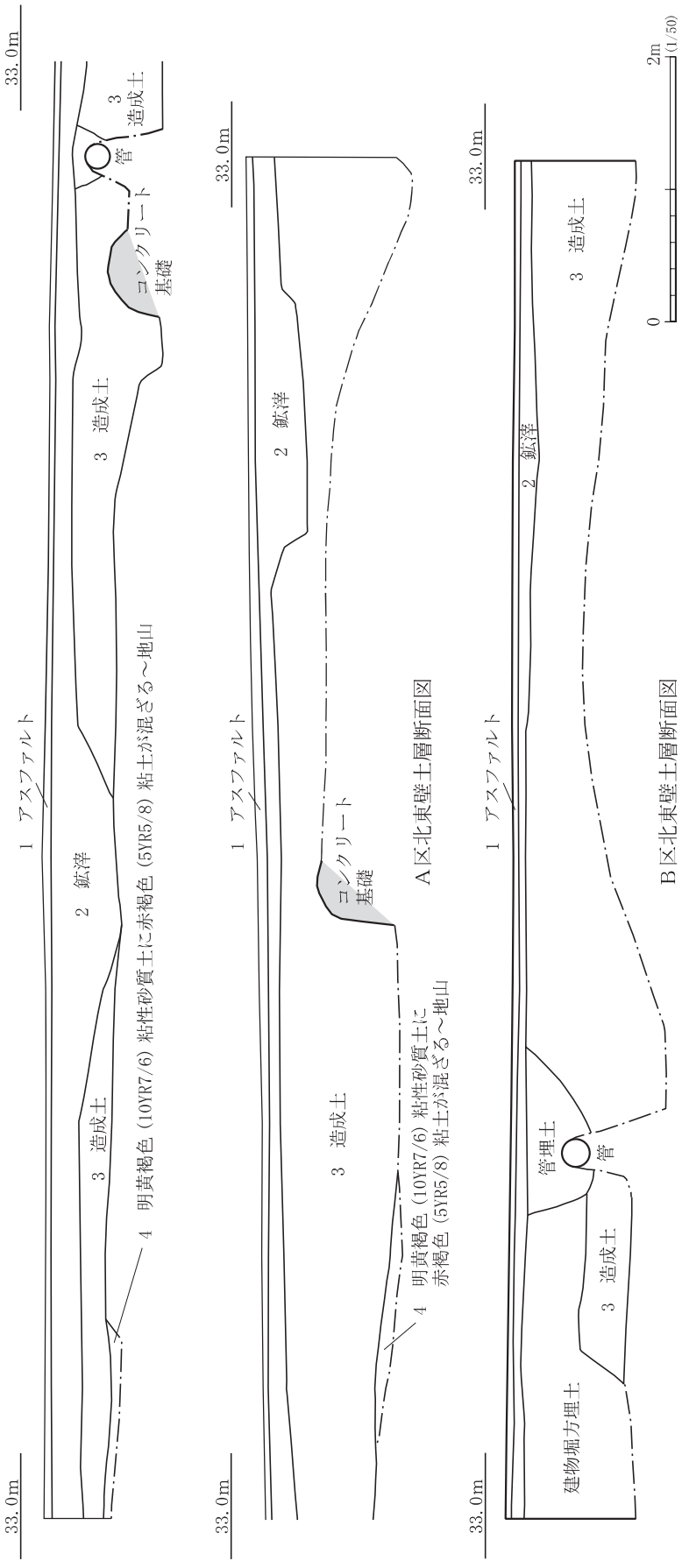

図 28 調査区土層断面図

写真 45 A区全景（北東から）

写真 46 A区全景（南から）

写真 47 B区全景（南西から）

2. 工学部光半導体素子実験室新営に伴う試掘調査

調査地区　常盤構内テニスコート北東側空閑地　　**調査期間**　平成16年11月1日 ー11月15日

調査面積　52.5㎡　　調査担当　横山成己

調査結果

(1)調査の経緯(図29)

常盤構内北東部、テニスコート北東側の空閑地において、光半導体素子実験室の新営工事が計画されたことを受け(発掘調査を要する工事計画として、平成16年8月20日に埋蔵文化財資料館専門委員会にて承認)、開発予定地の埋蔵文化財発掘調査を実施しすることとなった。開発予定地は同年9月に実施した調査地(工学部定歪速度応力腐食割れ試験用実験室新営工事に伴う試掘調査)の北西に隣接した地点であり、その調査成果から今回の調査地も南西から北東に向かい地山が降下していくことが予想された。従って今回の調査では、地山の高所と予想される新営予定地南西側に幅1.5m×長さ25mの調査区を設け、さらに地山の降下状況を確認するため北東に直行する方向に調査区を設けた。従って調査区全体の形状はT字形を呈している。

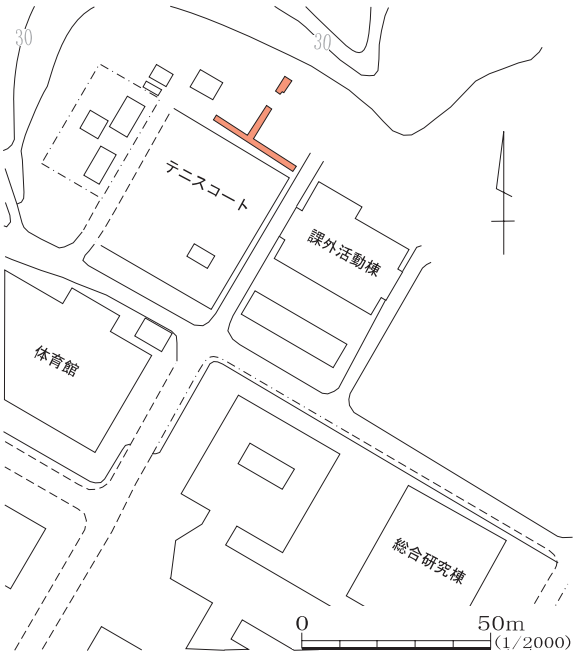

図 29 調査区位置図

(2)基本層序(写真48・49)

調査区全域で確認した層序は以下の通りである。

第1層…表土(層厚10～40㎝)

第2層…造成土(層厚10～150㎝)

第3層…明黄褐色(10YR7/6)粘性砂質土に赤褐色(5YR5/8)粘土が混ざる～地山

写真 48 調査区南西部南西壁土層断面(北西から)

(3)遺構(図30、写真50・51)

地山の高所側に設けた南東－北西方向の調査区では、地山面に小規模なピット2基を検出した。造成土上から掘り込まれたものではなかったために慎重に検出・遺構掘削を行ったが、ピット1の埋土からは近現代のガラス容器や磁器片が出土した。従ってこのピットは当地が造成される以前に形成されたものではあるが、時期的に新しいものであることが確認された。ピット2は埋土中に遺物を含まなかったが、埋土の性質はピット1と類似していることから、その性格もピット1と同様なものであろう。

写真 49 調査区北部北西壁土層断面(南から)

写真 50 調査区北西部（北東から）

写真 51 調査区南東部（北から）

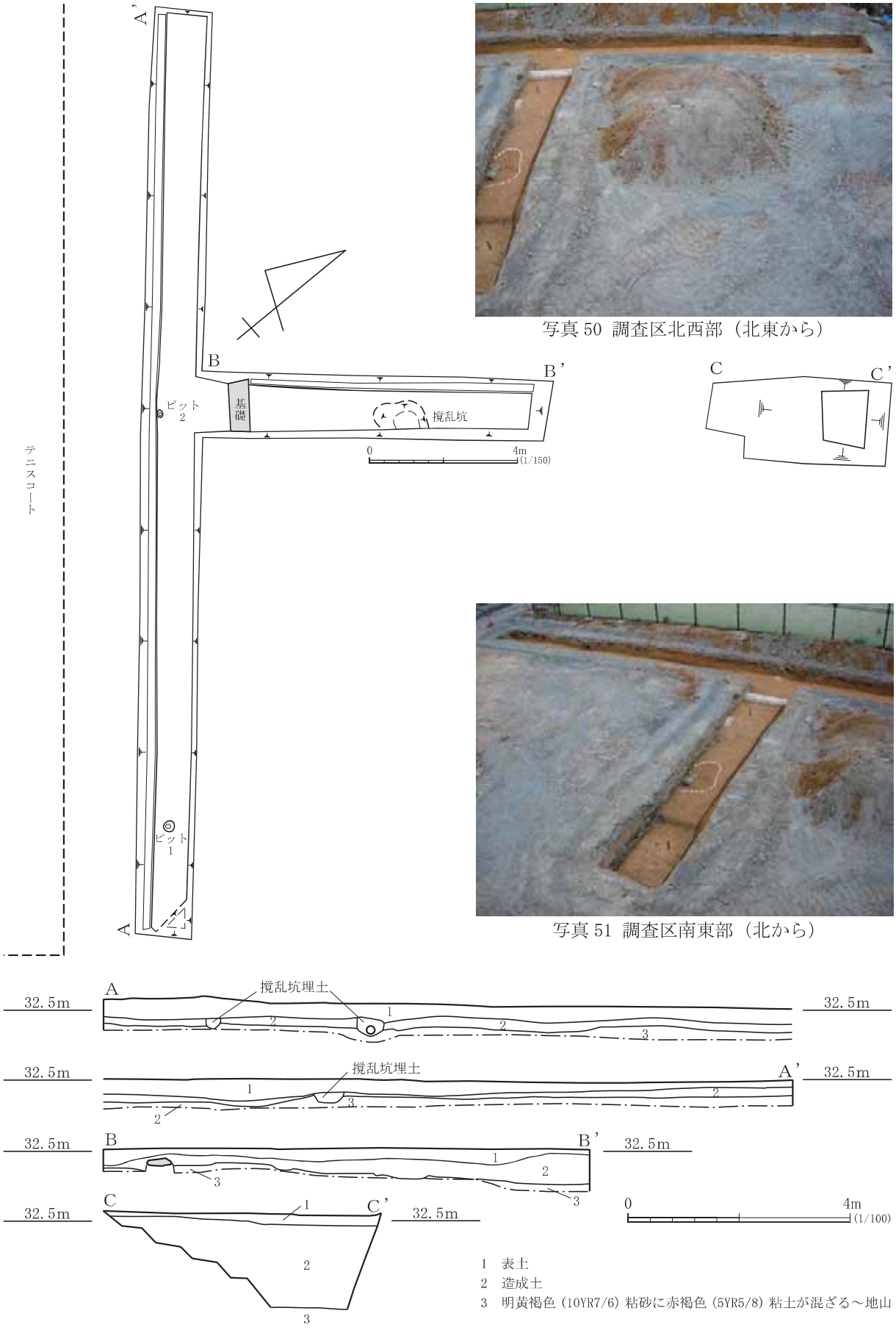

図 30 調査区平面図・土層断面図

（3）小結

今回の調査では、当初の予測通り南西から北東方向への地山の降下が確認された。地山面は、調査区南西部では現況地表面の下0.4mで検出されるが、北東端部では現況地表面から下に1.8mでの検出となっており、急激な降下を見せている。検出した2基のピットに関しては近現代のものであり、埋蔵文化財保護の対象外である。

本年度に実施した常盤構内北部での2次の試掘調査により、調査地周辺に埋蔵文化財が存在する可能性は極めて低くなったと言える。しかしながら、調査地の南東約200mに位置する国際交流会館新営業調査区では段状遺構が確認されるとともにナイフ形石器が出土している[註1]。今後とも常盤構内での土地掘削に関しては慎重な対応が必要であろう。

［註］

1）村田裕一(2004)「第2章　常盤構内国際交流会館新営に伴う発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅥ・ⅩⅦ』,山口

3. 工学部雨水幹線工事に伴う立会調査

調査地区　常盤構内門所衛南側空閑地

調査期間　平成17年2月3日

調査面積　9㎡

調査担当　横山成己

調査結果　宇部市東梶坂地区の浸水を解消するため、宇部市による雨水幹線工事が計画された。工事に伴い常盤構内に立坑の設置が計画されたため、掘削時に立会調査を実施した。

確認した層序は以下の通りである。

第1層…表土（層厚70㎝）

第2層…旧表土（層厚12㎝）

第3層…蛇紋岩風化層（層厚90㎝以上）～地山

常盤構内南部では、当館がこれまでに実施した調査によって遺構が検出された事例は皆無である。しかしながら、表土中から須恵器がするなど[註1]、過去においては遺跡地であった可能性が十分にある。常盤構内の大部分は大学建設時に大規模に造成され、旧地形は大きく改変されている。従って今後とも埋蔵文化財の確認は困難である可能性が高いと言えるが、継続的な調査は必要であろう。

［註］

1）河村吉行(1985)「第5章　宇部（常盤構内）工学部校舎新営に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』,山口

図31 調査区位置図

写真52 調査区断面（北西から）